

Title	アンリ・ムオの墓碑をルワンブラバーン近郊に訪ねる：ムオの日記について
Sub Title	Henri Mouhot's diary and his tomb in Laos
Author	木村, 宗吉(Kimura, Sokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1968
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.2 (1968. 9) ,p.141(313)- 145(317)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19680900-0141">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19680900-0141</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## アンリ・ムオの墓碑をルワンプラバーン近郊に訪ねる

——ムオの日記について——

木村 宗吉

版のムオの日記の紹介を兼ねて、彼の墓碑について述べたい。

### 二

一九六六年、次のような本が出版された。Henri Mouhot's Diary, *Travels in the Central Parts of Siam, Cambodia and Laos during the Years 1858—61, Abridged and Edited by Christopher Pym*, Oxford University Press, 1966. アンリ・ムオ (1826~61) は、周知のように、一八五八年から一八六一年にかけてタイ・カンボジア・ラオスを調査探険したフランスの博物学者であり、アンコールの遺跡の紹介者として名高い。本書 Oxford 版 'Henri Mouhot's Diary' は、彼の旅行記の最新の英語版である。私は、この本の編集者 Christopher Pym の序文により、ムオの墓碑がラオスの王都ルワンプラバーンからあまり遠くない山中に残っていることを知った。たまたま私は一九六七年、ラオスを旅行し、ルワンプラバーンを訪れる機会を得たので、Pym の序文をたよりにムオの墓碑を訪ね、その位置を確かめることができた。そこで、私は以下このたび出版された Oxford

アンリ・ムオの墓碑をルワンプラバーン近郊に訪ねる

Alexandre Henri Mouhot は、一八二六年五月十五日、Montbéliard (Doubs 県) で生れた。十八歳のときロシアへ行き、フランス語の家庭教師をしたり、陸軍士官学校でフランス語を教えたりしたが、休暇を利用してポーランドやクリミア半島へ旅行した。一八五四年、フランスへ帰った。クリミア戦争が起り、仏・露関係が悪化した年である。一八五六年、渡英して結婚。妻はアフリカ探険家として有名な Mungo Park の一族であり、ムオは Park と縁つづきになったことを名譽としたようである。ムオは一八五八年四月二七日ロンドンから乗船、四ヶ月半を経て、九月十二日メナム河口のパークナムに到着した。ラーマ四世治下のタイ国である。「パークナムは、シャム王にとつてセヴァストポリ要塞やクロンスタット要塞にあたる。けれども、ヨーロッパの一艦隊なら簡単にパークナムを制圧し、パークナムで朝

食をとつた艦隊司令官は、その日の夕飯をバンコクでとるのであるう、と私は空想した。」(三頁) 彼はこう書いている。

ムオは以後、一八六一年ルワンプラバーンの近くで死ぬまでの三年間、バンコクを基地として、四つの旅行をおこなっている。

第一回目は、一八五八年十月から十二月まで。メナム河を小舟でさかのぼり、五日をついやしてアユタヤーに行く。また、プラッタバートやサラブリーを訪れ、十二月バンコクへ帰る。

第二回目は、一八五八年十二月末から一八六〇年四月まで。主としてカンボジア旅行。ムオはバンコクで漁船に乗り、一八五九年一月四日、チャンタブーン(チャンタブリーの旧称)に着く。

彼は小舟を買つて附近の島々を訪ねたり、チャンタブリーの近くの野山を歩いたりして約三ヶ月をついやす。その後、海路カンボジアの Kampot に行く。そこから、陸路、旅を続けて当時の首都 Udong に至った。Udang Udong に近い Pinhalu (Ponhealu) に行き、七月の大半をそこで宣教師とともに過ごす。ムオは東北カンボジアの Stiën 族を調査するため、Phnom Penh に出で必要な品物をととのえてから、Kompong Cham 附近までメコン河をさかのぼる。そこから東へ向つて陸路困難な旅を続け、八月の中ごろ、目的地 Brelum に到着する。Brelum は宣教師の前哨基地ともいふべき所、彼は宣教師の客としてそこに三ヶ月半滞在して Stiën の観察を続け、彼らの衣・食・住・農耕・狩猟・結婚・葬式・祭り・信仰等について興味ある記述を残している。一八五九年十一月末 Brelum をたち、クリスマスの数日

前、Ponhealu に帰つて来る。そこから北上、Tonle Sap を船で渡る。「湖水のまんなかに高い棒杭が立つており、それがシャム王国とカンボジア王国の境界を示している。」(八一頁)と、彼は書いている。ムオは一八六〇年一月、Battambang の一宣教師の案内で Angkor に行き、そこに三週間滞在して Angkor Wat や Angkor Thom 等の遺跡を調査、三月五日 Battambang をたち、四月四日、無事十五ヶ月にわたる旅を終えてバンコクに帰つて来る。

第三回目は、一八六〇年五月から八月まで。ペットブリーの山中ですごす。バンコクに帰つてからラオスへの旅の準備をする。

第四回目にして最後の旅は、一八六〇年秋から一八六一年十一月まで。秋バンコクを出発して翌一八六一年二月末、チャイヤプームまで進むが、旅に必要な象や牛が得られず、やむを得ずバンコクへ引き返す。バンコクに半月ほどいて再び出発。七月二五日、陸路ルワンプラバーンへ到着する。ムオは彼の生涯の最後の三ヶ月、すなわち一八六一年の八月・九月・十月をルワンプラバーンに近い山や村ですごす。彼はルワンプラバーンに帰る途中、十月十九日、熱病にかかる。「十月二十九日。おお神よ、私をかわれみたまえ！」これが、彼の最後の記録になる。それから十二日後の十一月十日、永眠する。享年三五。彼の遺品、つまり、日記の原稿や採集品等は、彼が Phrai と Deng とよんだ二人の忠実な従者によつて三ヶ月後バンコクへ持ちかえられる。こうしてムオの日記は、森の中に埋もれることなくヨーロッパに伝わり、ま

もなく整理出版されて西欧世界の注目の的となる。

### 三

ムオの日記には、従来、三つの version があつた。以下それを、Pym の序文にしたがつて刊行の年代順に列挙すると――。

(一) The French magazine version (Tour du Monde, 1863, Nos. 196—204). これは、ムオの死後二年目の一八六三年、Hachette 社が出版する Tour du Monde 誌上に雑誌用に編集されて九回にわたつて連載されたもの。最終回の二〇四号の末尾に、F. de L. という編集者のかしら文字あり。

(二) The English book version (Travels in the Central Parts of Indo-china (Siam), Cambodia, and Laos, 2 vols, 1864), この英語版は、イギリスの the Royal Geographical Society の幹旋で、同協会所属の出版社 John Murray によつて出版されたもの。ムオ自筆の原稿に基づいて編集されており、氣象上の記録、民話、カンボジア語の語彙、博物学上の新発見物の表等を含む。

(三) The French book version (Voyage dans les Royaumes de Siam, de Cambodge, de Laos et autres parties centrales de l'Indochine, 1868). これは(一)を底本として、Hachette 社が一八六八年に出版したもの。編集者は Ferdinand de Lanoye。前述のものに、Tour du Monde 誌の最終回の末尾には F. de L. というかしら文字あり、したがつて、Pym が

アンリ・ムオの墓碑をルワンプラバーン近郊に訪ねる

言うように、(一)と(三)は同一人の編集になるものらしい。昭和十七年改造社が出版したアンリ・ムオ著大岩誠訳「タイ・カンボジア・ラオス諸王国遍歴記」は、(三)の全訳である。

ムオ自筆の原稿は現在ムオ家にあり、Pym は同家の好意により原稿を見し、それと(二)の英語版とを比較して、(二)が最も信頼できる version であると認めている。したがつて、当然今回の Oxford 版は(二)に基づいている。Oxford 版は本文一五六頁、博物学上の報告等を省略したのもとより、旅行記そのものも短縮されている。Pym はムオが家人に宛てた手紙を本文中の適当な所に入れたり、綴りの明らかな誤りを訂正したりしている。たとえば、'Touli-Sap' や 'Penom-Penh' は、ムオが書いた 'n' を 'u' と誤つたためなので訂正しているが原則として固有名詞の綴りはそのままにしている。全体として Pym 編集の本書は、紙数に制限されているが正確であり、一般の読者にも読みやすいものになっている。

### 四

ムオの墓碑は彼の遺体が埋葬された地に一八六七年に建てられた。前記の(三)の版による Doudart de Lagrée は一八六七年五月二四日、次のような文を「欧州」紙に寄せている。

「…………彼の死体はルアン・プラバーンから三軒のナム・カン Nam-Kan 河畔、ナパオ Naphao の町に近くところに埋葬されている。私は氏の墓側に我々の尊敬を表明し、氏のこの国に於け

(三二五) 一四三

る思い出を記念するためにささやかなる記念碑の建設をラオス当局に願ひ出た。ラオス王はこの願ひを心からの喜びを以て許可し、その上記念碑に要する材料一切の提供までも申出てくれた。私はド・ラポルト de Laporte 氏にその建設を依頼したが、そ



墓碑のオ・ム・リ・アン

れは長さ一米八十糎、高さ一米十糎、幅八十糎の煉瓦建になる筈である。その一面に嵌められる石にはアンリ・ムオ氏の名と、一八六七年の文字が刻まれることになつてゐる。ド・ラポルト氏は下図を描かれたが、これはド・ラポルト氏の名前によつてムオ氏の家族に贈られる筈になつてゐる。」

(アンリ・ムオ著大岩誠訳、  
「タイ・カンボジア・ラオス諸王  
國通歴記」三  
二七—二八頁)

現存の墓碑は、一八八七年に Auguste Pavie が建てたものである。Henri Deydier がムオの墓石は Ban Phanom において言ふ (Henri Deydier, Introduction à la Connaissance du Laos, p. 125) 近年ここを訪れた Pym は、墓へ行く道はメコン河の支流の Nan Khan に沿つており、Ba Peunom から来た村人にきいたら墓の所在はすぐ判明、墓は

道と川との中間部の森の中の空地にあつた、と言う。

私は一九六七年の四月中旬、ウィエンチャンからルワンプラバンへ来た。ムオの墓碑を訪ねることが、ここへ来た私の主な目的ではないが、行けるようなら行つてみたいと思つていたので、その位置等について、ルワンプラバンで尋ねてみたが、いかなる情報も得られなかつた。そこで、ある朝八時ごろ、私は一人バングローを出て墓へ向つた。

Nam Khan はルワンプラバンの町のはずれでメコン河に注ぐ溪流である。兩岸に山が迫つてゐる。川の左岸に沿つて山道を進む。そのうちに、はるか下の方に Nam Khan が見え出した。急に部落に出る。小さな寺もある。煙草や菓子を買つて店できくと、ここが Ban Phanom、西洋人の墓ならまだずつと先で歩いて四、五十分だろう」と言う。道は下り坂になり、河原に出てしまう。うしろから投網をかついだ男が来る。「西洋人の墓」についてきくと、確実に知つてゐる。彼は Ban Noun という次の部落に帰るところで、墓は途中にあるから案内してやろうと言う。河原をかなり歩いた時、彼は急に立ちどまり、右側の山の茂みをさして、「ここだ」と言う。彼のあとから茂みを分けて山の斜面を登つて行くと、蔓植物におおわれた墓碑が目の前に現われた。彼に感謝する。ルワンプラバンから Ban Phanom の部落まで、私の足で約一時間半、部落から墓碑まで約一時間、都合二時間半ぐらゐであつた。

Deydier によると一九五一年に極東学院の斡旋で修理された  
 というこの墓碑は、山の斜面の藪の中にあり、基部はかなり土中  
 に没して荒廃が甚だしい。前面にはめられた板石には、次のよう  
 な文字が刻まれている。

H. MOUHOT Naturaliste 1829—1867

これによると、

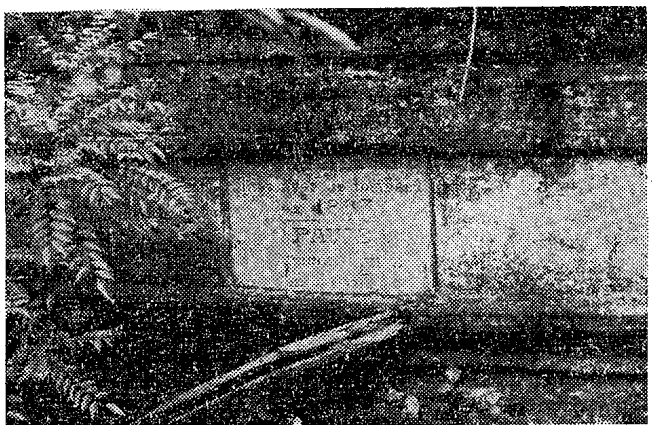
ムオの生年と没年  
 は、一八二九—一  
 八六七年である。  
 しかし、ムオの生  
 年は、Pym の序  
 文をはじめ諸本の  
 示すところによる  
 と、私の知るかぎ  
 り一八二六年であ  
 る。一方、ムオの  
 没年は、一八六一  
 年である。それが  
 一八六七年と刻ま  
 れた原因について  
 Pym は、最初墓  
 を建てた Doudar  
 t de Lagrée は



前 面

・H. MOUHOT-Mai 1867・  
 と墓の建設年を刻み、一八  
 八三年に第二の墓を建てた  
 Dr. Meis は一八六七年を  
 ムオの没年とし、一八八七  
 年に第三の墓を建てた Pa-  
 vie がこれを受け継いだ、  
 と説明している。

墓碑の裏面にも板石がは  
 められており、文字はかな  
 り摩滅しているが、次のよ  
 うなものであると思われ  
 る。



裏 面

DOUDART DE LAGREE  
 Fit elever ce tombeau  
 en 1867

PAVIE  
 Le reconstruisit  
 en 1887

私は十二時ごろここを去り、一時半ごろにルワンプラバインへ  
 帰つて来た。

アンリ・ムオの墓碑をルワンプラバイン近郊に訪ねる